

イスラエル農村雑感

渡辺博史

イスラエルが正式に新興ユダヤ民族の共和国となつたのは一九四八年であつたから、今年で未だ十二年しか経っていないということになる。

イスラエルが建国活動はきわめて活発で

あり、国内旅行をしてみると、「三年前までは石ころの山だつたといつたようなところに建立されている立派な農村に出くわすことがよくある。

汗だくになつて石ころの山を畠に交え、熱妙の沙漠に水利パイプを流し込み、かけ声も高らかに農村建設にいそしんでいるたくましい情景がいたるところにみられたが、わたしはそのような機会にしばしば「大変な仕事をですかね」とからへに呼びかけてみた。

だがかれらは決つたように笑顔で答えてくれた。

「なにしろ、自國をもつたんですからね」

しかし、このように村づくりにいどんでいる農民は海外からのユダヤ人引揚者たちであり、その殆んどは元來からの農民でない。彼らはいわばオニ次、オニ三次産業の就業者であり、先住国における農業従事者はせいぜいそれらの一割にも充たない現状である。しかもこのような引揚者が独立以降、年々激増しつつあるのだが、現今のはイスラエルの現状は前述の如くであるから右種の就業者を大量に必要とはせず、逆にそれをイスラエル農民として再形成していくなければならない立場に立たされているのである。

イスラエルの農村はキブツ（Kibbutz）

（協同型組合村）、モシヤブ・オブ・デイム（Moshav Ovdim—個人型組合村）、モシヤブ・シイツハイ（Moshav Shitufi）

（中間型組合村）の三形態から構成されてゐるといわれるが、これらは以上の諸条件を充分含めたうえで作られたものである。

☆☆☆

キブツはヘブライ語で「かたまり」「協同」という意味をもつてゐるが、右の三つの形態のうち、これが最も徹底した集団化・協同組合方式をとつてゐる。

衣食住のすべてがそのキブツ員全員の共有となつております、個人所有は許されない。食事は時間交代制で全員が大食堂で会食し、キブツの經營、食事以外の諸作業も当番制で全員が参加するようになつてゐる。子供の養育も誕生以後、家庭ではなく集団の手でなされる。

これに対しても、オブ・デイムは生産物の販売方法だけを協同化形式とし、ほかは個人単位の生活を認めてゐる。またモ・シイツハイは以上二者の中間的性格をとつたもので、家族生活の仕方だけを個人単位とし、ほかは協同単位の形としている。

イスラエルが今日もつとも力をいれているのは右の三者のうち、キブツである。農業経験をもたない、異質の引揚者たちを未開の地へ送り、農村建設をさせていくためには協同作業と協同生活が最も効果的と考えられるからである。

だが、引揚者のなかには一とくにアジア・アフリカの低開發地域から帰つたユダヤ人たるものが多くいる。そこで、そのようなことをも考慮にへれて、

多少とも異つたニュアンスをもつ村をいくつか作り、いわば諸国帰りの引揚者へ集団選択の余裕を与えてやろうというのが、三形態提唱の意図となつてゐる。

しかしともあれ、これら三形態の共通点として特に注目されることは、①各々の土地が

国有地であること、②協同組合方式に重点がおかれてること、③引揚者の異質ユダヤ人たちを、イスラエル國のもとに、新生ユダヤ民族として統合・同化させていこうとする意図のもとに、村づくり・國づくりの組織的集団形成の配慮が綿密になされているといふこと（少し詳しくは、拙稿「ユダヤ民族の統合問題」—イスラエル『社会人類学』20号、1960年10月に載せておいた）であつて、これは近來のアジア・アフリカ独立諸国に次第に注目されつつある。

現にアジアではビルマ、アフリカではガニアをはじめ、すでにイスラエル式農村が採用されていくつか作られているし、イスラエルにおいてしばしば行なわれている政府・大学・研究所共催の農村協同化のセミナーや、新興諸國家の近代化に関する講習会には各國の参加メンバーが次第に増え、本腰を入れて往来しつつある。

イスラエルではそれらのリーダーを迎えて、単なる理論説明や討議だけでなく、参加者を実際キブツやモシャで村に同行して実習させたり、地域を指定せずに希望地におもむかせて、そこで数日間宿泊させたりしている。

イスラエル農村が單にユダヤ人引揚者収容

のために特設されているということだけではなく、農村社会の近代化に対して広きに適用できる国策上の見地からも深い配慮がはらわれていることは、以上のことからうかがわれよう。

☆☆☆☆
わたしは、わたしと一緒に先頭、右様のイスラエル・セミナーに参加した一ビルマ人（ビルマ農業協同組合のリーダー）の言葉を思い出す。

「わたしの国から、あなた（日本）のほうへ日本農業を研究するため、沢山の学生が留学している。

だが正直のことをいうと、その学生達が帰国したあと決つたようだ言葉は、日本式農法（米づくり）から学ぶものはあるが、日本式農村（組織）から学ぶものはなにもないということだ。

われわれは、村づくりの組織が國づくりの組織のために機能的連結をもつた国民社会的なものでなければ、いただけないのだ……」
これは単なる一ビルマ人の言葉として済まさる発言であろうか。

☆☆☆☆
「政治体制と村落」がいま、村研の共同研究のテーマになつてゐる。

これを曖昧なままに終らせることなく、どこまでもつきとめて、明日の農村建設、いな国家建設の重要な資料や発言となり得べく結実させたいという念願切なるものがある。